



能登支援活動報告



一月一日に発生した能登地震は、その後のテレビなどの報道で大きな衝撃を与えました。その映像には倒壊した家や道路を塞ぐ土砂災害、隆起した土地に傾いた家などが映っています。

このような甚大な被害の光景は二〇一一年以来毎年のように見られるようになってしまいました。今回は一月一日からということもあり、特に大きな衝撃を受けたようです。

その後、一月一二日に南三陸町の社会福祉協議会拠点である「結の里」へと向かいました。訪問時、イベントが行われており能登に向けてメッセージを贈るために住民から多くの寄せ書きが集められていました。また社協の方々には能登に行きたいと希望しており、そのための準備と提案を行政に提出していたようです。その後、復興住宅地を訪れた際には自治会長が心配そうな表情で能登の地震を話題にしていました。その会話を通して、私は能登を視察し皆様に報告する必要があると考えました。その後、次々とお電話をいただきました。「能登にはいつ行きますか。」といった



問い合わせがありました。私は社協が能登に行くことが決定したことで、迷いなく視察を行うことにしました。

第一次能登支援視察活動 (Assessment)

一月二十九日～二月一日まで、視察と支援活動を行いました。能登半島への訪問は初めてでしたが、視察は重要であり、以前に内灘聖書教会（ベース）を訪れた経験がある私は、キリスト教支援団体の情報拠点を目指します。ベースには全キ災メンバー、救世軍、オペレーション・ブレッシング・ジャパン（以後OBJ）の方々があり、早速七尾市にある物資倉庫を視察し、周辺の福祉施設への物資の配布を手伝いました。別の日には、能登半島地震の震源地である珠洲市を目指しましたが、能登町までで断念し、代わりに地域住民からの情報を収集して報告しました。



第二次能登支援活動

二月二日～二四日まで、南三陸町社会福祉協議会の後方支援活動を実施しました。社協は珠洲市の社協と連絡を取り、炊き出し支援や倒壊した家屋の片付け、住民の貴重品の収集支援を依頼を

受けたそうです。私たちは社協が大型バスに積まない二日分の炊き出しに必要な物資と、他の細かい物資の必要性を現地チームに要請し確保する役割を担いました。

現場に到着後はすぐに二トントラックに積み込みを開始し、さらにチーム（CareProject）を結成して、OBJの十三名と共に珠洲市で活動しました。炊き出しの活動は三箇所です。

三箇所の三崎中学校・正院小学校・蛸島小学校の周辺では、家屋倒壊の被害が顕著に見られ、住民の方々は今も生活に注意が必要な状況です。昼間は皆自宅に戻り、出来る限りの対応しているようでした。昼食時の炊き出しでは、支援者と被災者が集まり、社協のメンバーが用意した食事を提供しました。三崎中学校では一五〇人分の食事が必要と言われていましたが、それ以上の人数が集まったように見受けられました。夕食の炊き出し地である正院小学校では、グラウンドに仮設住宅もありました。建てられたばかりですが、既に入居者があり、グラウンドは舗装されず泥濘（どろぬか）の状態で、集会所もなく、自治会もまだ立ち上がっていませんでした。仮設住宅に入居した方々は、自立が求められているようで、炊き出しの提供があっても取りに來ないことがあります。これを聞いた社協のメンバーは、問題と判断し、是非食事に來られ



るようにと声をかけましたが、結局は仮設住宅へ食事を届けることになりました。このような状況は東日本大震災でも見られ、避難所と仮設住宅、また復興住宅との間には常にコミュニケーションの問題が生じます。社協のメンバーはこれを見逃さず、二〇〇食の配膳を正院小学校で行いました。



翌日、被害が最も大きかった珠洲市にある嶋島地域で炊き出しを行いました。その道中も多くの家屋が倒壊し、道路には倒れた自宅の一部がはみ出し、マンホールなどの埋設物が露出している場所が多くありました。

嶋島小学校に到着すると、建物を守られていて地域の方々が避難していませんでした。避難者は外に出ることはありませんでした。配膳は全て関係者が内部に持ち込む状況でした。ただし周辺にある他の小規模な避難所や一・五次避難された方々は、避難所の門をくぐって炊き出しを受け取りに来ていました。これらの方々とのお話の中で、不安や悩みの現状を聞くことができませんでした。その中には、経済的な問題や高齢者にとって解決が難しい悩みも含まれていました。

また、時間的制約や新しい環境下での生活の困難さに対する複雑な感情もありました。現在は多くのボランティアが参加しており、まさにハネムーン期の真つ最中であり、今しばらくこの状況が続くと考えられます。したがって、体力に自信のある方や、チームに参加してボランティア活動を行いたいと考える人は、今がそのタイミングだと思えます。次に訪れるのは幻滅期です。この期間には茶話会が有効になります。アーティストなどが参加し、茶話会（傾聴ボランティア）を行い、支

援を必要としているときに耳を傾ける。このように、時期を考慮した活動を行うことで、コミュニケーションを通じて福音（宣証）を示すことができます。皆さんができることを祈りながら、準備をして実践されることをお勧めします。

文責…中澤竜生



ホッカイロを被災地へ



YouTubeでも第一次・第二次の能登支援活動報告ビデオを掲載中です。

以下のリンクよりご覧ください。

なお、プライバシー配慮のため限定公開にしています。

SNSへのシェアはご遠慮くださいますようお願いいたします。



https://youtu.be/8sSPDPem4_o

第一次能登支援の別視点

二月二一日、第二次能登支援活動のため、

金沢市内のホテルに到着しました。今回のチーム名は「ケア・プロジェクト」です。このチームは惨事ストレスマネージメントを一年以上学び続けている七人のメンバーで構成されています。地域支援ネットワークからは中澤竜生、中澤佳子、PSV Japan代表の川上守利氏、クラッシュ・ジャパンからは、三浦寿夫氏、山尾研一氏、公認心理師のICISE公認インストラクターの郭ヘレン氏、Care・Projectよりは原田花子氏を併せて七名です。私たちが宿泊したホテルは、二次避難所となっていて、夕食のお弁当が用意され配布されていました。実はこの二次避難所は被災地よりもっとも近い場所でも一時間ほど離れており、高齢者はなかなか自宅の様子などを知ることができない状況にあります。ですから一時は休むかもしれませんが、将来に不安を感じていることが表情から伝わってきました。



今回のプロジェクトは、能登半島の被災

に際し、南三陸町社会福祉協議会主催のもと、女性七名と男性十名が参加しました。女性は炊き出しを提供し、男性は瓦礫撤去作業に従事しました。この活動を知った地域支援ネットワークからは、被災地へと先立ち状況確認と物資調達、人材協力を依頼しました。この取り組みに大きく関わったのが、フードバンクとして活動する「いのちのパン」と「オペレーション・ブレッシング・ジャパン」でした。今回の活動で必要な協力を互いに約

束を交わして第一次能登支援活動を終えました。その後、私たちは、何度も社協より情報を得て、細部の準備を重ねていきます。ただ、珠洲市の社協からの返答は遅く、対応するのにも困惑している状態でした。これは被災地でよく起こる状況であり、動きと対応が遅れることは常だということ。社協も、私たちもそれを理解し、対応し準備しました。今回の活動は主に炊き出しです。で、南三陸町から来られる支援者が到着する前に必要な物資を届ける必要がありました。

二二日、トラックの荷台に物資を積

んで、集合場所となる珠洲市社協の拠点である「健康増進センター」に向かいました。金沢市内から二時間半かかり、道路が崩壊する箇所などを注意深く通りながら到着し、トラックをここに置いて金沢市内に戻りました。



二三日、午前五時三〇分にホテルを出発し、午前九時三〇分から珠洲市にある三崎中学校避難所での活動が始まります。炊き出しのメニューは、蛤ご飯とたら汁です。待ち時間にはカフェを提供しました。避難所の住民から加えて、周辺地域の住民合わせて総勢一五〇食以上を提供しました。



その後、現地活動を終えて次の場所に移動します。夕食は珠洲市正院小学校の避難所と仮設住宅で行われます。瓦礫撤去を行った南三陸町の男性と共に、キーマカレーとたら汁を提供しました。被災者の方々との会話を通じて現状を確認しました。南三陸町から来られた方々は大型バスで宿泊します。



二四日、早朝五時三〇分に出発しました。珠洲市にある蛸島小学校避難所では、仙台名物の油麩、切り昆布、かまぼこをのせたうどんと蛤ご飯を提供しました。手作りのスイーツやコーヒーマも楽しめました。雪の中でしたが、地元の方々と交流し、感謝の気持ちを伝えることができました。その夜は能登で一泊し、翌日に南三陸町への帰路につき、夕方に到着したそうです。



現在も能登にある珠洲市では、水道が使用できない状況です。生活用水は、自衛隊や行政が運ぶ水と井戸水で賄われています。また、報道ではあまり取り上げられていませんが、多くの家屋が倒壊し、今後の復旧が不透明な状況で、途方に暮れる方々が多くいらっしゃいます。

文責：中澤佳子

中澤栄子
活動報告
サロニニ

1/12

明社イベントの為
自治会長さんのところへ訪問



2/14

石巻オアシス教会



1/17

石巻オアシス教会



2/24

関上復興住宅集会所



東北キリシタン史跡ツアー

東北ヘルプの企画により、東北キリシタン史跡ツアーが開催されます。西日本のキリシタン史跡は有名で、多くの方々が史跡巡りのツアーに参加されたことでしょう。そのツアーに拍車をかけたのは、遠藤周作の『沈黙』であり、映画でも話題を呼びました。この『沈黙』をご覧になり、言い表せない切なさを味わったことと思います。しかし、それでも信仰を貫いた人々の心情に思いを寄せ、当時の事を深く探求する歴史愛好家もいます。このような伝承はありますが、当時の遺跡を通して東北にも多くのキリシタン史跡が存在します。また、その伝承は人々の心を温かくし、何故か霊的な神秘さも感じさせてくれます。今回紹介したいのはほんの一部ですが、宮城県北部境内に位置する三経塚を紹介します。

登米市東和にある三経塚は、一六三九年に始まった弾圧から約七〇年後の享保と呼ばれる時代に海無沢で一二〇人が処刑され、それを三箇所にお経と共に埋められたことから「三経塚」と呼ばれています。その一つの塚は海無沢から近い山下にあり、屋敷の住人たちが代々口伝えにより密かに供養していたとされています。しかし、最後の住人が昭和五七年に北海道へ移住することとなり、隣家の近親者に、この山が処刑場であったことが初めて明かされ、広く知られるようになりました。



した。この話によれば、山の中腹には処刑場と処刑待機所があります。その距離はわずか三〇メートルほどで、手と足に五寸釘を打ち付けられ、磔や打首などの処刑が行われたと伝えられています。当時、一二〇人の人々は静かに待機場所にとされ、この地域のほとんどが潜伏キリシタンであったため、その中の一二〇人は進んで手を挙げ他の人々を守ったとされています。彼らは「転ぶ」ということはなかったと言われています。



今回紹介した理由は、「地域支援ネットワーク」が支援を続けている南三陸町が、かつてキリシタンの里だったことが判明したからです。この事実は、震災がなければ決して知ることがなかったであろう歴史です。特に入谷地区に点在する一〇〇年以上の歴史を持つ家屋には、今でもキリシタンであったであろう遺物や古文書などが残っていました。この発見は、自宅を訪問する際に「仏壇やその引き出しに昔から伝わる大切な資料はありませんか」という質問に対し、「あ、そういういば」と言ってお出される物が多くあります。その中にはキリシタンであったであろう遺物が含まれています。津波が起こる前には、きつとそのような物証があったのだらうと思うと、残念さが込み上げてきます。私が支援活動を続けていた

際、その時に知り合った一人の初老が、「中澤さん、君はクリスチャンだから、この地にいたキリシタンの無念をここでやらせ」と言いました。突然の言葉でしたので、彼が何を意味しているのか理解できませんでしたが、この地、志津川と歌津にはかつてキリシタンが存在したことが分かりました。その後、志津川町にある大雄寺もそのゆかりであり、多くの墓石には古くなったものでありながらキリシタンのシンボルマークが刻まれ、今もその姿を保っています。また、登米市においても史跡群があり、町内会などに支援協力として手伝った時、やはりキリシタンが存在したことが明らかになりました。特に、登米市の当時の市長にお会いした際、彼は昔のキリシタンの活動によって北上川が氾濫し悩まされた所を、キリシタンのネットワークによって河川工事が行われ、洪水を防いだことに感謝し、私たちクリスチャンにお礼を述べてくれました。このように登米市には、キリシタンによる歴史的な遺産が多く残されています。先に述べた遺跡がその一例です。

文責：中澤竜生

東北ヘルプHP
川上直哉師のキリシタン文章

